都留文科大学研究紀要　第93集（2021年３月）
The Tsuru University Review, No.93（March, 2021）

ウィズコロナ時代のインターンシップを可能にする動画教材開発と学生の学び

Analyzing Students' Reflection in Making Teaching Materials for "The Internship for Teaching and Education" in the COVID-19 Era

市　川　　桂

ICHIKAWA Katsura

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、学生が地元の学校でインターンシップを実施することが難しくなっている。日本が海外からの訪問者に対して国境を開放したところで、現状では都留市内や近隣の町で留学生を多数引き連れてインターンシップを行うことは非常に困難である。そこで、学校訪問を疑似体験できる動画教材を開発した。本稿は、動画教材作成の過程を概観するとともに、学生４名のリフレクションに焦点をあてて、この動画教材を作成することを通して学生が効果的なチーム作りについて学んだことを明らかにする。

キーワード：リフレクション、教材開発、学び、テキストマイニング分析

はじめに

国際教育学科では、平成30年度より北欧をはじめとするヨーロッパ諸国の教員養成系大学と協定を通じて交換留学を行っている。これまでの二年間で、63名の留学生が都留で生活し国際教育学科の学生と共に学んできた。この交換留学プログラムの一環で実施しているInternship for Teaching and Education（以下、インターンシップ）という授業では、近隣の幼稚園や学校を訪問して日本の教育について体験的に学ぶことを目的としている。毎年留学生の多くが履修し、地元の先生方や子どもたちと交流することで、都留文科大学や交換留学プログラムについてヨーロッパ諸国での認知度を高めてきた。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大によって、海外からの渡航者が入国できなくなり、今年度はじめからは学内でも原則オンラインで授業を実施することとなった。９月末から始まるプログラムに留学生が参加できることになったとしても、長引いた休校により授業時間数の確保や行事の調整で多忙な幼稚園や学校に対して負担になるような形でのインターンシップの実施は困難であると考えられた。事前に空港でPCR検査を受けてその結果が陰性であっても、数十名のヨーロッパからの留学生が子どもと触れ合うことに不安を感じる保護者がほとんどであることも想定し、学校を直接訪問しなくても留学生が学べるように準備をしておくことが必要であった。そこで考案したのが、動画教材作成プロジェクトである。

動画教材作成についての類似したプロジェクトには、信州大学の教育実習の一部である観察実習をバーチャル化したもの[1]があるが、本研究では教員ではなく学生が主体となって教材を作成していること、留学生を主対象とした比較教育学的な視点の教材であるという点が大きく異なる。また、学生によるリフレクションの自由記述をテキストマイニングで分析した先行研究には、谷塚らによる研究（2009年）や須田による研究（2017年）があるが、谷塚らによるテキストマイニング分析はコミュニケーション観点のみにとどまっており、須田による研究の焦点はデータの分析手法の開発であることが本研究とは異なっている。

「ウィズコロナ時代」と呼ばれる今、これまでとは異なる教育・研究上の対応について検討する様々なシンポジウムや研究会が催されている。そのため、コロナ禍における取り組みについてはこれから論文化が進み、研究が蓄積されるトピックであると思われる。本稿は、実習系の授業の実施を可能にする動画教材をどのように作成したのかという過程を描いた点、および、この動画教材の作成に携わった４名の学生のリフレクションを分析した点で研究の蓄積に寄与することを目的としている。

１．動画教材の開発について

（１）企画

インターンシップのための動画教材の作成を最初に企画したのは６月はじめのことで、緊急事態宣言が解除された直後であった。それ以前の2020年２月に実施する予定だった、都留市校長会での令和元年度のインターンシップへのご協力のお礼についても、新型コロナウイルス感染拡大への対応があるため断られたという経緯があり、落ち着くまでは地元の学校を訪問することは困難であることを感じていた。緊急事態宣言下の山梨県内でも、小中学校および高等学校の休校が続いていたことから、昨年度までと同様に学生を連れてインターンシップを行うことを再考せざるを得なくなったのである。

そこで、インターンシップで訪問していた幼稚園、小学校、中学・高等学校の３つの学校段階に分けて動画教材を作成することを決め、企画段階から学生４名に協力を依頼した。教員一人ですべて作成するのではなく、教材開発プロジェクトにすることによって、動画教材自体の質を向上させること、学生自身の学びや成長にもつなげるということを企図してのことである。学生４名の選出にあたっては、インターナショナルコーディネーターの櫻場さんに相談を行った。留学準備や留学後のリフレクションなどを通じて国際教育学科の学生一人ひとりとこまめに面談していて、学生の適性や興味関心などをよく把握されているからである。

この取り組みの全体を通して、対面で話し合いを実施する際には、換気している部屋で２ｍ以上の距離を取って席につき、マスクをつけて感染対策を十分に行った。また、オンライン会議システムのZoomや、 クラウドでファイル共有できるGoogleドライブ、Dropboxを活用して、離れた場所にいても共同作業ができるようにした。

リーダーには、上級生と様々なプロジェクトに携わってきた３年生を指名し、まず彼女と打ち合わせを行った。彼女はデンマークへの留学を経験していることから、北欧諸国と日本の教育実践の相違点がよくわかるように動画教材を作成したいという企画をよく理解してくれた。そして、動画撮影のノウハウを熟知している学生を撮影主任に、英語力と文

脈把握力が群を抜いている学生を英語字幕担当に、特筆すべき芸術的センスに恵まれている学生をアートディレクターにすることも相談して決めた。

初回の打ち合わせでは、このプロジェクトのコア（核や中心）となるコンセプトは何か、話し合いの上で明確にした。また、いつまでに完成させるかなどのタイムラインもおおまかに設定した。

Goal：Internship for Teaching and Educationの素材をつくる

コンセプト：北欧の留学生が、いろんな立場から日本の教育現場を見る・考えることができる

タイムライン

6/22 10:00-13:00 MTG① タイムライン、コンセプト決め

6/29 10:00-14:00 MTG② 30日の予定、何を撮るのかの決定

6/30 8:30-10:00 富士学苑での撮影（登校、HR、授業、学校の様子）まさや、るり
10:30- 下吉田第一小学校での撮影

7/6 10:00-12:00 MTG③ 小・中・高の動画の種類・本数決定 しゅうじ、まさやリード
７日の予定、何を撮るのかの決定

7/7 森のようちえんでの撮影 まさや、るり

7/13 10:00-12:00 MTG④ 幼稚園の動画の種類・本数決定 しゅうじ、まさやリード

7/27 10:00-12:00 MTG⑤ 第１回動画制作発表
- カットをして動画を軽く編集した状態
- 各学校の先生方に見ていただき、許可を得る
- 写っちゃまずいもの等がないかの確認
→これ以降BGM,字幕等ガチガチに編集して仕上げる

8月末までに納品

＊補足：富士学苑YouTu部（中・高）はまだ発足していないため、素材はない

	幼稚園	小学校	中学校	高校
	森のようちえん 月江寺幼稚園	下吉田第一	富士学苑	富士学苑
動画	・教室内、外の活動 ・外遊び ・しつけ ・ご飯	・集団登校 ・授業 ・授業外の時間 （給食、掃除、休み時間、朝の会、帰りの会） ・下校-地域の人が遊び[illegible]	・登校 ・授業 ・授業外の時間 （HR、ランチ、掃除、休み時間） ・部活動 ・委員会	・授業 ・授業外の時間 ・部活動 ・委員会

図１：初回打ち合わせ議事録の一部

こうして毎回議事録や重要事項が書かれたホワイトボードの写真を記録として残しておくことも、学生リーダーが主導して自主的に実施していた。もちろん、教員は毎回の打ち合わせに出席し、学生から質問があれば答えていたが、共に議論を通じて教材を創りあげるということを大切にした。その背景には、国際バカロレア（IB）の学習者像がある。

IB 教員養成を行っている本学科では、国際的な視野を持ち、「人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間」[2]を育成し、本学で学ぶ学生が（１）探究する人、（２）知識のある人、（３）考える人、（４）コミュニケーションができる人、（５）信念をもつ人、（６）心を開く人、（７）思いやりのある人、（８）挑戦する人、（９）バランスのとれた人、(10) 振り返りができる人、という10の学習者像に合致するように生涯にわたる成長を促す授業や課外の取り組みを行っている。今回の動画教材作成についても、学生の成長の一環となるように設定した。

そして、ジョンソンら（2010）が提唱している、リーダーシップを分担する形で複数

名が協力し合う活動のあり方を念頭に置いてこのプロジェクトを行った。ジョンソンらが基本要素として挙げているのは、次の５点である。（１）肯定的相互依存：グループの学習目標を達成するために、基本的な信頼関係に基づいて各自の力を最大限に提供し合い、助け合うこと、（２）積極的相互交流：学生同士が積極的に交流し、教え合い、学び合うこと。このような交流は、肯定的な相互依存関係とともに、学習効果を高めるために必要不可欠である、（３）個人の２つの責任：学生は自分の学びと仲間の学びに対して責任を負うこと。グループ内で学習内容を理解していない仲間がいる場合は積極的に支援すること、（４）社会的スキルの促進：学習活動を通じてグループにおける学び合いに必要な学習スキルを積極的に用い、また、獲得していくこと、（５）活動の振り返り：学習活動の質を高めていくために、グループ内で学習活動に対する建設的な評価を行い、改善していくこと。教員はこれらの実現のために影ながら支援を行った。

（２）撮影

プロジェクトチームを組織することに先立って、動画教材の素材となる映像や写真を撮影できるかどうか、これまでにインターンシップで訪問していた３校に教員がコンタクトを取った。認定こども園ウブントゥ忍野の森、富士吉田市立下吉田第一小学校、私立富士学苑中学・高等学校に撮影を快諾していただくことができ、教材の作成に向けて動くことが決まった。

撮影に際しては、訪問人数を必要最低限の３名（教員含む）に抑え、撮影前の数日間は体温を記録することに加えて、撮影当日は連絡先を記入した体調チェックシートを各自提出した。この取り組みを行う上では、感染症患者が関係者に出ないように細心の配慮を払った。

(a) 2020年６月30日（火）８:00～10:20 私立富士学苑中学・高等学校

最初に撮影した富士学苑中・高ではオープンキャンパスがオンライン開催になるとのことで、教頭の山口先生と有志の生徒が中心となり、学校生活がよくわかるような写真や動画を撮影されていた。この日の撮影ですべてを撮り切ることは難しいため、動画教材に必要な素材については提供してもらえることになった。部活動や休み時間の様子など、中高生がいきいきとした表情を見せている素材が教材の中に入ることで、教員を目指す海外の学生にとってさらに興味深く魅力的になったと考えている。

６月末といえば、生徒全員が毎日登校するようになった時期ではあったが[3]、コロナ対策を徹底しながら授業をされている状況だったため、高校生が朝登校してきて校門で検温と手の消毒をしている様子や、中学校の数学の授業で１クラスを２つに分けてICTを活用しながら指導している様子も撮影することができた。日本の学校がどのように子どもたちをコロナから守ろうと奮闘しているかを描くことで、日本よりもかなり早い時期から学校を再開していたデンマークやスウェーデンと比較することが可能な教材になった。

テストの順位表が教室に掲示されている写真や、高校生40人が１つの教室に座っている写真など、北欧諸国の学校では見られない様子も撮影内容に含めることで、ディスカッションの論点になるようにしたことも教材開発上の工夫のひとつである。

(b) 2020年 6 月30日（火）10:30～16:00 富士吉田市立下吉田第一小学校

小学校についての動画教材を作るにあたって、撮影内容を決めるための打ち合わせでトピックとして挙がったのは、授業（特に小学校英語がどのように実施されているかということや、クラス担任がほぼすべての授業を教えていること）、休み時間、給食、掃除、子どもたちだけで集団下校している様子などである。残念ながらコロナの影響で授業時間を確保する必要があるため、掃除の時間は時間割からなくなっていた。給食の時間には給食当番が盛り付けや配膳をするのではなく、児童一人ひとりが自分の給食を盛り付けてスクール形式のままで友達とはあまりしゃべらずに食べているなど、これまでの日本の学校の様子とは違った風景を撮影することになった。

富士学苑の撮影と大きく違っているのは、先生へのインタビューを撮影したということである。毎年実施しているインターンシップでは、留学生は必ずと言っていいほど先生方に質問をしていたため、先生方の言葉で留学生に語りかける動画が不可欠であると考えた。撮影の 1 週間前にインタビュー調査の目的および質問内容、教材としての使用方法を詳細に記載した書面を校長先生宛てにお送りし、学校からの了承を得るとともに、インタビュー対象者の先生方（英語活動・国際理解教育担当の日本人教員と富士吉田市の ALT のリーダー教員）に目を通してもらった。インタビュー対象者の先生方は、事前に各質問項目への回答やご自分の考えをまとめてくださっていた。これは後々、英語字幕をつける際に大いに参考になった。インタビューは英語で実施したが、英語が母語でない学生を対象にした教材であるため、英語字幕をつけることにした。インタビューでは、撮影主任の指示で定点カメラを複数配置しておくことで、動画教材が単調な画にならないように配慮した。

(c) 2020年 7 月13日（月）10:00～15:30 認定こども園ウブントゥ忍野の森

認定こども園の撮影については、前の 2 校のときから変化が見られた。日本の就学前教育ではどのような活動をどのような考えのもとに実施しているか理解することができるということを目標に据えて、撮影の事前打ち合わせを具体的に進めることができたのである。これは、他の学校の撮影とは 2 週間間隔があき、編集作業に入って「こういう映像素材があれば良かったのに」、「こういうアングルからの映像素材が欲しかった」といった反省が出てきていたことが大きい。 1 分程度の短い動画をたくさん撮影すること、その場の雰囲気が伝わるようにパノラマの映像も撮影すること、子ども目線も先生目線もできる限りたくさん撮影することなどが挙げられ、撮影班は事前に担当まで決めておくことができた。

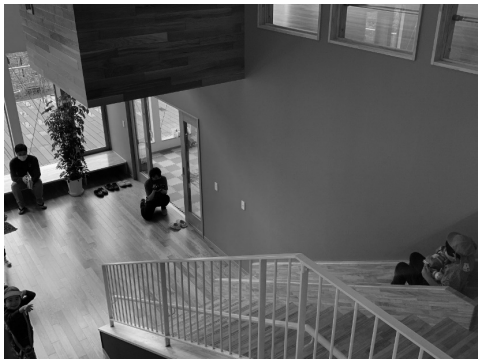

写真１：認定こども園での撮影の様子

綿密な打ち合わせの結果、撮影は非常にスムーズに行うことができた。また、伝統的な日本の幼稚園とは異なる興味深い取り組みを多く実施されている園であるため、園長先生による解説も撮影した。撮影班は、どの瞬間も撮り逃さないという姿勢で臨み、撮影した動画素材は300本以上となった。素材が豊富にあるということは、編集作業が膨大になるということでもあることに、後から気づくことになる。

（３）編集

編集で大切にしたのは、動画教材を見た人がその場所を実際に訪問したような気持ちになるということである。子どもの目線、先生方の目線、見学者の目線でカットを入れたり、インタビューのときに関係する映像をはさんだりといった、動画だからこそできる効果を入れることで見飽きない仕上がりになっている。見飽きない、という観点からさらに言うと、動画教材１つひとつの時間は３～６分未満になるようにした。

編集については誰もこれまでに経験したことがなかったため、まずはアートディレクターの学生が下図のような絵コンテを作成し、共有した。作品づくりを素材選びから始める際に、一定の完成イメージを持っておき、形づくっていく過程で一部を削り何かを付け加えることでより良い作品に仕上げていく様子を確認することができた。

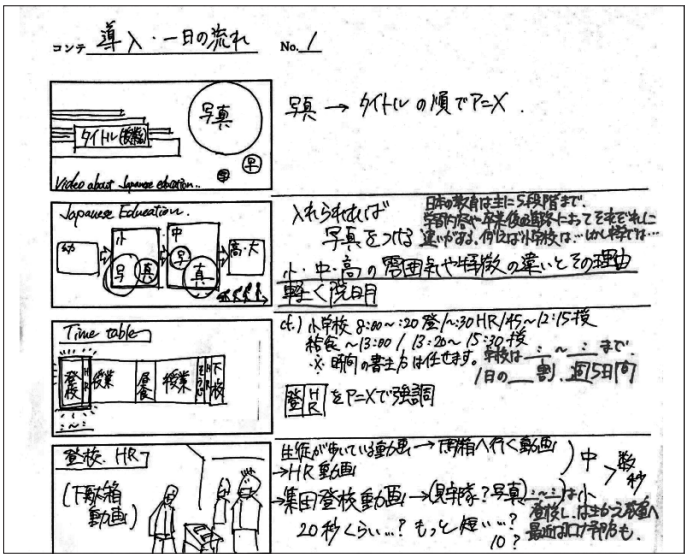

図２：絵コンテの一部

編集ソフトには、アドビのプレミアプロを利用した。このソフトウェアは全員が初めて使うものであったが、編集担当の３名がそれぞれ YouTube にアップされている使い方レクチャー動画で勉強して使いこなしていた。編集会議の際に、アートディレクターが中心となってアドバイスする様子も頻繁に見られ、編集作業の進行につれて技術レベルは格段に向上していった。編集作業と並行して、字幕にしたい内容を場面ごとに作成し、英語字幕担当の学生が場面の時間の長さや文字数を考慮して字幕を作成していく重要な作業も行った。会議では、何を伝えたいのか、留学生に説明しなければ伝わらないことは何か、ということを軸に英語字幕の見直しと改善も行った。英語字幕の見直しと言っても文法上の修正ではなく、「ごちそうさま」や「お願いします」に代表される日本独特の表現には注釈を入れよう、であるとか、どこで字幕を切って次の場面に持ってくると見ている人に優しいか、という、英語を用いて表現するという観点からの改善である。

写真２：動画編集会議の様子（左）、編集についてアドバイスする様子（右）

前項で取り上げた撮影打ち合わせ会議や、動画編集・字幕会議は毎週設定し、週ごとのタスクの確認や進捗状況の情報共有、成果物へのコメントと改善作業などを行った。毎回２時間程度にして、あとは個人作業をベースに必要に応じて連絡を取り合うようにした。

認定こども園の動画編集については、共有ドライブに保存している素材に具体的な名前を付ける工夫をしていたが、使いたい場面を探すことに何時間もかかってしまった。完成度の高さと、所要時間と労力のバランスについては、課題が残ったと言える。

他の前期の授業がオンライン実施になったことで、学生は実家に帰省するなどリモートでこのプロジェクトに参加していた。初回打ち合わせ会議とリフレクションの最終日以外に全員が大学に集まるということはなく、学内のICTが整っているおかげでZoomやGoogleドライブを活用しながら非常にスムーズに進行できた。

２．動画教材についての考察

（１）完成した動画教材

６月に動画教材作成のために動き出してから、すべての教材が完成するまでおよそ３ヶ月を要した。表１は、完成した動画教材のタイトルと長さ（再生時間）の一覧表である。

表１：動画教材一覧

	タイトル	長さ
1	A tour of wald kindergarten	５分17秒
2	Playing outside in the forest	４分43秒
3	Lunchtime and cleaning	５分20秒
4	Interview with the president at wald kindergarten about studying	５分55秒
5	What lessons look like in Japan: Elementary school	４分25秒
6	Interview with a classroom teacher (Part １)	４分５秒
7	Interview with a classroom teacher (Part ２)	５分４秒
8	Tom Irwin: Assistant language teacher (Part １)	５分12秒
9	Tom Irwin: Assistant language teacher (Part ２)	４分58秒
10	A tour of elementary, junior high and high school	３分39秒
11	Classes in junior high school	５分18秒
12	One day of Japanese school	５分８秒

認定こども園については４本、小学校は７本、中学・高等学校は３本の教材ができたことがわかる。表の10番目および12番目の動画教材が小、中、高をカバーした内容であるため、上記のように学校段階別で計算すると、14本の教材があることになる。また、小学校の教材数が多いように見えるが、これは２名の教員へのインタビュー動画をそれぞれ２つに分割して１本あたりの再生時間を短くしたからである。バランス良く、講義だけでは伝えにくい内容をおさえたラインナップになっている。

これらの動画教材は成果物としてDVDにまとめ、撮影に協力してくださった園および学校にお渡しした。また、作成した学生４名が主体となって、９月25日にそれぞれの学校をまわって上映会を実施することができた。撮影班ではなかった学生２名は初めて現地を訪問することができ、全員が自分たちの創りあげたものに対する評価を直接聞くことができる、貴重な機会となった。

（2）指導可能な内容

この動画教材で学生に指導可能な内容をまとめたものが、下表である。方法論的には授業時間中に映像資料として示すことができるのはもちろんのこと、ディスカッションの材料にすることもできる。授業の前に学生が動画教材を見てくることで、反転授業を実施することも可能であるが、その際にどのように学生に配布あるいは共有するかを検討する必要があろう。子どもたちの顔がはっきり映っていることを考えて、外部に流出しないように配慮しなければならないからである。

表２：教材を通じて指導可能な内容

	指導可能な内容
1	幼稚園の施設・設備、学年別クラス、一日の流れ、朝の会、日直、学習内容の概要、外遊びの概要、給食の概要、先生の仕事内容、歯磨き、読書、掃除の概要、昼寝、製作、運動会、おやつ（補食）
2	外遊びの遊具、子どもの遊び、子どもの興味・関心、読書とのつながり、先生の仕事内容、異年齢集団、遊びの意味、伝統的な幼稚園との差異
3	給食、調理スタッフの仕事内容、年齢ごとの給食の様子、手洗いうがい、食育（栄養）、子どもと食、好き嫌い、歯磨き、読書、お絵かき、「いただきます」と「ごちそうさま」、掃除、役割
4	幼稚園での学習の意味、文字の読み書き、計算、読書、学ぶこと・知ることへの興味、日常生活とのつながり、学習内容、園長先生から見た日本の幼児教育
5	小学校の施設・設備、理科教育、算数教育、英語活動、教材、授業の進め方、児童の挙手・発言、グループワーク、ICT 活用、子どもの学び合い、ALT
6	小学校教諭から見た日本の教育、プログラミング授業、学習指導要領、児童一人ひとりに合わせた指導、日本の小学校における英語教育、ALT の意義、教員を目指す学生へのメッセージ
7	
8	ALT から見た日本の教育、外国語教育についての日米比較、ALT の資格と仕事内容、日本の児童、日本の教員事情、英語活動のカリキュラム、ALT の意義、教員を目指す学生へのメッセージ
9	
10	小中高の施設・設備、校歌、職員室、図工教育、数学教育、ICT 活用、掲示物、１クラスの人数、制服、二足制、コロナ対策、休み時間の様子、書道
11	登校の様子、１クラスの人数、時間割、テストと順位表の貼り出し、部活動、中学校の英語教育、教科書、総合的な学習の時間、校則、数学教育、ICT 活用、論理の授業（私立学校の教育）、挨拶
12	日本の教育システム、時間割、登下校、コロナ対策、教員の仕事内容、二足制、朝の会・帰りの会、担任、日直、挨拶、休み時間の様子、給食・お弁当、歯磨き、掃除、部活動

注：左欄の番号が示す教材は、表１に示したとおり．

３．学生の学びについての分析

（1）リフレクションの概要

このプロジェクトが終わりに差し掛かった８月下旬から、リフレクションの準備を行った。こうしたプロジェクトはやりっぱなしにするのではなく、学生の考えや思いを言語化し、学びの深化やこれからの成長に結びつけることが重要である。リフレクションシート

はIBのCAS（Creativity, Activity, Service）で広く用いられているものに準じて、問いに答えていく形式のものを作成した。学生４名にはメール添付で８月24日に送付しておき、編集会議の際にリフレクションの目的について説明を行った。それぞれの質問項目を一緒に見ていき、どういったことを書けばいいか学生からの質問を受け付けて、２週間で書いてみるように伝えた。学生は自身のリフレクションシートをGoogleドライブで共有し、お互いに書いたことを確認した上でまた加筆修正を行っていた。

リフレクションシートの項目は、（１）この経験を通じて成長できたこと、自身の強み、（２）この経験を通じて直面し乗り越えた課題と、そのプロセスの中で得た新たなスキル、（３）この経験についてどのように企画し実行したかということ、（４）この経験のためにがんばったことやコミットしたこと、（５）自分のスキルを活かして他者と協働することの大切さを感じたこと、（６）グローバルな課題に取り組んだと言えるかどうか、（７）他者と協働する上で、自身の選択と行動の正しさ、妥当性を認識したかどうか、という大きく７つについて学生に省察してもらう内容である。

リフレクションは、2020年９月７日（月）および９月14日（月）の２度にわたって実施した。下の写真は、９月14日のリフレクションで、このプロジェクトの期間内における学生それぞれのモチベーションをグラフ化したものである。全員、期間内にマイナスの方に落ちることはなかったが、役割の少なさ（動画素材が揃うまで、英語字幕担当とアートディレクターは手持ちぶさたになっていたようである。写真の「タ」および「し」を参照。また、撮影主任は撮影終了時をピークに、モチベーションが徐々に下がっている。写真の「マ」）、テストやレポート課題の提出（期末の時期が大変で、編集作業に対して気持ちを向けたり時間が割くことができなかったようである。写真の「ル」）、担当した編集に対する自己評価（うまくできた、もっとできるようになりたい、という気持ちの波があったようである。写真の「し」）が原因となって揺れ動いていたと考察することができる。今後同様のプロジェクトを行うときには、期間内の役割および業務量に偏りがないようにある程度コントロールすることで改善を図ることができるのではないだろうか。

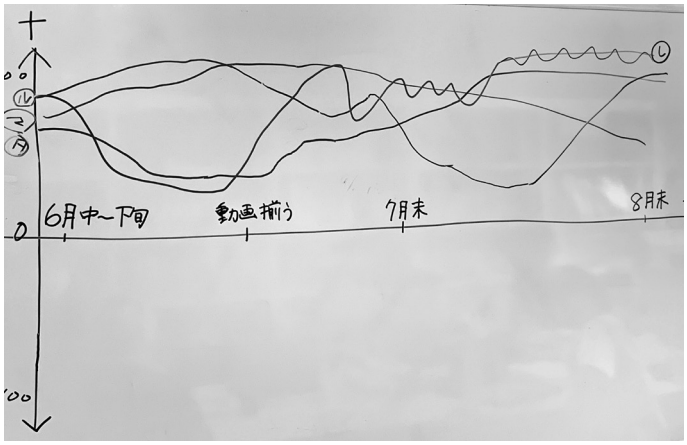

写真３：学生のモチベーションの波を可視化したグラフ

リフレクションシートに基づいた振り返りは、「他の人はどのように考えたか知りたい」ことを学生同士で聞いていく形式で行った。教員は合間に「それはなぜか」、「もう少しこ

の部分について説明してほしい」といった質問をするだけにとどめた。というのも、学生４名はこれまで毎週行ってきた会議で教員が口をはさむ必要がないくらい活発に意見を交わしており、目標を共有し、信頼関係を構築していたからである。

お互いのリフレクションの内容を共有したことによる新たな発見や見直しもあったようで、各自がリフレクションシートに加筆している姿が見られた。うまくいくチーム・ビルディングの要素に関しても、思索していた。今回のリフレクションは、今後学生たちが大学生活で、あるいは社会に出てから直面する様々な場面で力を発揮していく上での「自信」という足場になったのではないだろうか。

（２）リフレクションシートにおける学生の記述

二度のリフレクションセッションを通じて４名の学生が加筆修正したリフレクションシートの自由記述を題材に、KH Coder（Ver 3.0）を用いてテキストマイニング分析を行った。リフレクションの文字数の合計は１万1,158文字で、平均で一人あたり3,000字近く記述していることになる。語の共起関係を線で結んだのが、下図である。出現数による語の取捨選択については、最小出現数を３として60の共起関係を描画するように設定した。出現頻度の高い語ほど大きい円で描かれており、共起関係の強さが円の接触や線の濃さで表現されている。

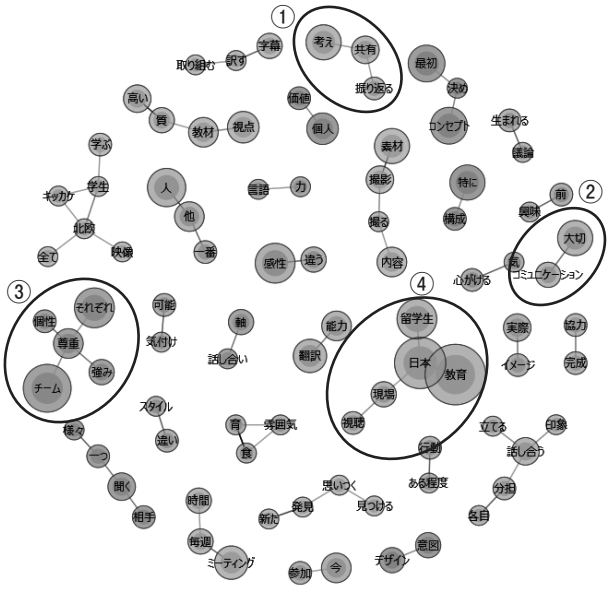

図３：自由記述の共起ネットワーク図

注：図中の４ヶ所を丸く囲み、それぞれに番号を振っている．

図中で示した出現頻度の高い４つの共起関係を特に取り上げて、どのような記述があったのか、具体的に見ていきたい。

①考え―共有―振り返る

・「*それぞれがやりたいことを話したり、考えていることを共有したりした上で決めることができたのがとても印象に残っている。*」

・「*仲間や先生と共有する機会に、作ったものを振り返り、より良くしようと改善したり、反省したりするスキルが大切だと感じた。*」

②大切―コミュニケーション

・「*チームで活動するときに大切だと私が考えていることは『共通認識』『コミュニケーション』である。*」

・「*この経験を通して、コミュニケーションの大切さを再実感した。*」

③それぞれ―個性―尊重―強み―チーム

・「*チームメンバーそれぞれの強み、視点を尊重しながら意見交換をすることができた。*」

・「*全員の個性や意見が尊重されるチーム・みんなが楽しく作業できるチームでありたいと私は考え行動した。*」

④留学生―日本―教育―現場―視聴

・「*ブレインストーミングの時に何か軸を決めて動画を作成した方が良いという指摘をしたり、留学生が分かり易い動画にするにはどのような流れにすべきかという話をしたりした。*」

・「*視聴者が、いろんな立場から日本の教育現場を見る・考えることができる動画を作成する。*」

・「*留学生には、食育や先生の立場、学校の雰囲気など、日本教育独自のものを感じてもらえると思う。*」

このように、①、②、③の共起関係において、学生たちは動画教材作成を通じてそれぞれの強みを活かしながら、チームで協働することによってさらに力を身に付けたことがわかる。また、④は、このプロジェクトの目的および目標がチームで共有できていたことを示している。これはジョンソンらが提唱している効果的な協同学習のモデルとも合致していることを示しており、一定の評価をすることができる。

今後、それぞれの学生が他者と力を合わせて物事に取り組んでいく際にも、今回身に付けた「いいチーム」を作り「いい成果」をあげるための方法が活かされていくことを期待している。

おわりに

以上のように、この夏に実施した動画教材開発プロジェクトは無事完了し、留学生に対する授業で活用できる動画教材が12本完成した。残念ながら９月末から予定していた今年の交換留学プログラムは見送られたが、この教材を用いてまずは国際教育学科の学生を対象に授業を実施したい。

このプロジェクトに参加してくれた４名の学生は、企画、撮影、編集、英語字幕作成などを通じて、チームで何かに取り組むことの難しさよりも、おもしろさや素晴らしさを学んだ。これからも授業内外で学生に学びの機会を提供していきたいと考えている。

本研究は、JSPS 科研費18K02731の助成を受けたものです。また、人を対象とした研究として、都留文科大学の研究倫理審査委員会で認められた上で実施しています。

謝辞

撮影にご協力くださった認定こども園ウブントゥ忍野の森、富士吉田市立下吉田第一小学校、富士学苑中学・高等学校のみなさまに心よりお礼申し上げます。困ったときに手を差しのべてもらえたこと、忘れません。そして、撮影、編集、字幕作成などに献身的に取り組み、唯一無二の動画教材を作成してくれた国際教育学科の吉岡るりさん、斎木柊志さん、サベッジ太陽さん、菅原匡絢さんに感謝と最大級の賛辞を贈ります。みなさんの素晴らしいチームワークを一番近くで見られることが私のモチベーションでした。本当にありがとう。最後になりましたが、いつも親身になって相談にのってくださるインターナショナルコーディネーターの櫻場江利子さんと福田誠治理事長にも感謝申し上げます。

参考引用文献

ジョンソン , D.・ジョンソン , R.・ホルベック , E.『学習の輪（改定新版）―学び合いの協同教育入門―』（石田裕久・梅原巳代子訳）二瓶社、2010年 .

須田昂宏「リアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの可視化―大学授業の実態把握のために―」日本教育工学会編『日本教育工学会論文誌』41巻 1 号、2017年、pp.13-28.

谷塚光典・東原義訓「（ショートレター）教員養成初期段階の学生のティーチング・ポートフォリオのテキストマイニング分析：INTASC 観点『コミュニケーション』に関するリフレクションの記述から」日本教育工学会編『日本教育工学会論文誌』33巻（Suppl.）2009年、pp.153-156.

---

[1] 信州大学比較教育学研究室ウェブサイト（2020年 9 月10日のポスト）を参照。https://shinshuedu.blogspot.com/2020/09/blog-post_10.html（2020年 9 月17日最終確認）

[2] IB コンソーシアムのウェブサイトより抜粋。https://ibconsortium.mext.go.jp/wp-content/uploads/2019/04/IB 学習者像 .pdf（2020年 9 月14日最終確認）

[3] 撮影日の前週までは、クラスの半分の生徒が登校し、残り半分はオンラインで授業を受けるという入れ替わり方式で学校が再開されていた。

Received : September, 24, 2020
Accepted : November, 4, 2020